

「……ちがうけど」

風汰が口ごもると、まーくんセンパイは、もう一度吹き出した。

「でもさ、けっこうあってるかもなあ」

「あってねーもん」

「そうか？ まあ、あっても、あってなくても、知らない世界を見るって、けっこうおもしろいけどな」

へっ……。そっか、そうだよな。

ぎゅるるる、風汰の豪快な腹の音に、まーくんセンパイはもう一度笑った。

駅前の『ほっとほっと亭』に入ると、すっと汗が引いた。冷房がきついくらいきいている。店の中はけっこう混んでいた。サラリーマン風の若い男のうしろに並んで、焼き肉弁当の大盛りを注文すると、風汰はベンチの横にある棚からマンガを一冊、適当に抜き出した。置いてあるマンガは昔からなぜか『こち亀』だけだ。めくりすぎてやわらかくなったページを読むともなしにぺらぺらやっている、店のドアが開く音がした。モノトーン柄の柔らかい感じのワンピースを着たキレイな女の人が入ってきて、髪にハンカチをあてた。

雨？ 外に目をやると、びかびかっと稲妻が走った。

「うわ、降ってきた」

「やだなあ」

店内にいた人たちは、口々につぶやきながら外に目をやっている。そのあいだに女の人は、カウンターでなにか注文をして、奥の壁際でスマホをいじりはじめた。

「焼き肉弁当大盛り、お待たせしました」

カウンターの向こうから、やけに滑舌のいい声が響く。

「あ、はいー、オレっす」

弁当を受け取って外に出ると、スコールのような雨が、アスファルトをたたきつけていた。店の中で少しあまやどりをするようかと振り向いたとき、目の端になにかがうつった。ん？ つーと顔を横に向けると、店の横に置いてある自販機のとなりに、小さな子がしゃがんでいた。

「わっ」と、思わず声をあげると、その子が顔を上げた。

しおん君？

「え、なんで？ 一人？」

風汰がそばに行くと、しおん君はおびえたようにひざを抱いた。

「オレだよ、オレ」

そろりと顔をあげたしおん君は、泣きそうな顔で風汰をにらんだ。

あ、そっか。

「オレだって」

風汰は中腰になり、左手で前髪を束ねた。